

学位論文(要旨)

戦後国語科における単元学習の展開に関する研究

—主題単元学習の展開と可能性—

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

池田 匡史

○研究の目的と方法

わが国の国語科教育において単元学習論は、戦後初期にその概念がアメリカより導入されて以降、時代による浮き沈みはあったものの、現在に至るまで学習者の主体的なことばの学びに繋がるものとして好意的な立場を取る論が非常に多く見られる。その中であって、各時代の国語科教育を映す鑑である単元学習論の実態を明るみにする研究は歴史研究の中で大きな領域を築いている。

その中で検討の対象に据えられたのは、GHQ/SCAP（連合国総司令部）の一部局であるCIE（民間情報教育局）による戦後新教育の形成への関わりの実態・戦後新教育の導入の参考にされたアメリカの単元学習論・実践現場への単元学習普及の役割を担った附属学校での実践、国語教科書、教育雑誌等の内実・国語科における単元学習論に対する批判論・代表的な単元学習実践者とその実践などがある。これらの研究によって、戦後国語科における単元学習の展開像が明らかになってきている。その一方で、未だ十分に明らかにはされていない事柄も存在する。

まず、国語科における単元学習論に対しては、様々な呼称の単元学習が展開されてきたことによる混乱が指摘されている。単元学習は、実践者によるもの、学校によるもの、研究者の立場によるものなど、多様な背景のもと具体化されたものである。そのため、多様な単元学習が生まれている。ただ、先のような単元の分類に関する疑問や混乱が生まれた要因には、各種単元が生まれた経緯が十分に探られていないことが課題として挙げられる。つまり、様々な単元は、どのような人物が、どのような目的を見据えて設定されるに至ったのかを明らかにする必要がある。このとき目的は、国語教育学研究の文脈との関係や具体的な学習者の存在など様々な面があったであろうことが想定される。ここに一点目の研究課題が設定される。

次に、戦後初期単元学習論が下火になる要因の一つであった批判論を、単元学習がどのように乗り越えたのかが十分に明らかにされていないことが挙げられる。つまり、戦後初期単元学習論に向けられた批判の中でも、特に文学的文章を読むことの学習が達成されないという批判に対する単元学習論の変容の過程を追う必要がある。ここに、研究課題の二点目が設定される。

ところで、研究課題の二点目に示した課題に取り組む際に仮説的に考え得る観点として、「主題単元」と呼ばれる方法が挙げられる。国語教育学研究の展開においては、多くの主題単元に関する理論や実践が提示されてきた。しかし、国語科における単元学習の中で主題単元は、一方では国語科における単元学習の枠内に組み込まれ、他方では枠外に押し出されている。では、これまで展開されてきた国語科における主題単元の営みは、どのような目的を見据えることによって、国語科の実践として展開されてきたのであろうか。第三の研究課題はここに設定される。

以上を踏まえ、本研究では単元学習論の中でも特に主題単元、主題単元学習と称されるものに焦点化し、以下の三点を研究課題に設定した。

- ①国語科の単元学習論の生成において、特に主題単元という種類の単元学習はどのような経緯で成立したのかを明らかにする。
- ②戦後初期の経験主義の考え方に基づいた単元学習が持つ課題を乗り越えようとした単元学習論の展開を明らかにする。
- ③国語科における主題単元は、どのような目的を見据えることによって国語科の実践として展開されてきたのかを明らかにする。

本研究では、上記の課題を解明するために、さまざまな時代に展開された主題単元学習に関する理論や実践を収集し、その展開の実際を記述するとともに、それらの歴史としての繋がりを解釈していくという方法を採用した。

○各章の概要

第1章 国語科における単元学習論研究史の成果と課題

第1章では、これまで国語科の単元学習論の展開を明らかにしようとする研究はどのような事柄に焦点を当てているのかを整理した上で、主題単元の展開を明らかにすることが、どのような研究上の価値を持つのかを述べた。

国語教育学研究において、単元学習論の展開を明らかにしようとする研究は、①戦後新教育の形式、言い換えれば単元学習導入のために、CIE がどのように関わったのかを明らかにしようとしたもの、②導入の際に大いに参考にされたアメリカの単元学習論がどのようなものだったのかを明らかにしようとしたもの、③戦後初期において日本の実践現場に単元学習像が普及するための媒介となった、附属学校の実践や国語教科書の単元構成などを検討したもの、④戦後初期の単元学習に対して向けられた批判論の実態を明らかにしようとしたもの、⑤戦後初期からその後の時代にかけて、一貫して単元学習に取り組んだ大村はまなどの実践者、およびその実践の特色を明らかにしようとしたもの、⑥再び単元学習が注目を集めた昭和40年代、50年代以降の単元学習論の展開を明らかにしようとしたものなどが存在することを確認した。

その中であって、国語科における主題単元の実践は、国語科の教科内容として認められ得るのかという疑問が向けられるという点において、単元学習の種類の中でも位置づけが特殊なものと言うことができる。しかし、単元学習論の展開を明らかにしようとする研究では、主題単元の展開に絞った研究が見られないという課題を述べた。

第2章 国語科における主題単元論の原理

第2章では、国語科における単元学習論のなかで、主題単元とはどのようなものとして存在し、どのような価値が期待されるものと考えられたがために、主題単元は展開されてきたのかを明らかにした。

そもそも主題単元というものは、アメリカでは「本来備わっている教科の内容」を主知主義的に学ぶものとされた「教材単元」の種類として位置づけられていたものであった。しかし、それが日本、さらには国語科に導入される際、ある抽象的な事柄を追究するということが、国語科に「本来備わっている教科の内容」と言えるのかという声もあり、学習者の興味、経験などを単元設定の根拠とする「経験単元」と位置づけられるようになった。ただその内実を見てみると、先のような経緯もあることから、「教材単元」、「経験単元」のどちらの特徴をも有したものとして主題単元が展開されてきたということを論じた。

この主題単元のように、ある主題に対する認識を作り上げることに對しては、言語技術の獲得にも繋がりやすいという報告があるだけでなく、内容面の評価的読みにも不可欠なものとする論も存在する。このようなことは、国語科において、「認識内容」を築き上げるという人文科学の基礎としての性格を打ち出すことができるものとして機能することになる。これらのことが、国語科の単元学習として主題単元というものが設定され得た要因と考えることができるのである。

また国語教科書では、このような主題単元への積極的な考えを学習者に伝えようとすることや、教材となる文章をまとめる際の観点として設定しやすいということもあり、各校種ともにおいて、主題単元構成が見られることも確認した。

第3章 読むことを組み込んだ単元学習としての主題単元論

第3章では、昭和30年代において推奨された主題単元論を、単元学習概念が大々的に導入された時代でもある戦後初期の単元学習論との関係のなかで検討した。

戦後初期においても、主題や話題を構成の軸とした単元学習も存在していた。しかしながら、その形態を採ったものが優れているなどといった価値判断はなされていなかったと言える。単元学習には、様々な形態が存在してしかるべきであるという考えも訴えられていたからである。その後、昭和20年代の終わりをもって、国語教育界では急激に単元学習離れが起こったのであるが、その中で、その方法論的な価値を認め、特に文学的文章を対象にした読むことが十分に果たされていないなどの戦後初期単元学習論の課題を乗り越えた上で、推奨すべき単元を模索していたのが興水実であった。興水は自身の単元学習論の中で、主題単元を推奨するに至ったのである。また、興水に関係性が近い存在であり、実践面から多くの論を展開した中沢政雄も興水の単元学習観に同調し、指導案レベルでもそれを具体化したと言える。

この時代の主題単元論は読解主義の波に覆われ、教材の「主題」を分析するという面に流れてしまったがために広がりを見せたとは言いがたいという面や、理論として具体化されていないという面もあるが、機能主義と呼ばれる立場を採る人物によって主題単元が推奨されたことは、国語科における主題単元の展開のなかで大きな出来事であったということを確認した。

第4章 読解主義を乗り越えるための主題単元論

第4章では、読解主義を乗り越えようとする営みがなされていた昭和40年代を中心とする年代に展開された主題単元論を検討した。この年代においては、昭和30年代には具体化されていたとは言えない状況にあった詳細な理論的枠組みを、長谷川孝士というオピニオンリーダーが設定したことに意義が見出だされることを述べた。長谷川が問題意識を向けていたものは、読解主義と言われていた読むことの教育が、人間不在のものであり、学習者の主体性が出せないというところにあった。このような学習者の主体性の回復という面では、国語科における読書指導が注目され、この時代多く検討されてきた。その文脈と結びつける形で、長谷川と関係の近い実践者であった白石等は、小学校において主題単元による読書指導を実践的に展開したことを明らかにした。

第5章 具体的な実践としての主題単元学習の展開

第5章では、昭和50年代から平成10年前後にかけて、主に高等学校で多く報告された主題単元学習実践を検討した。

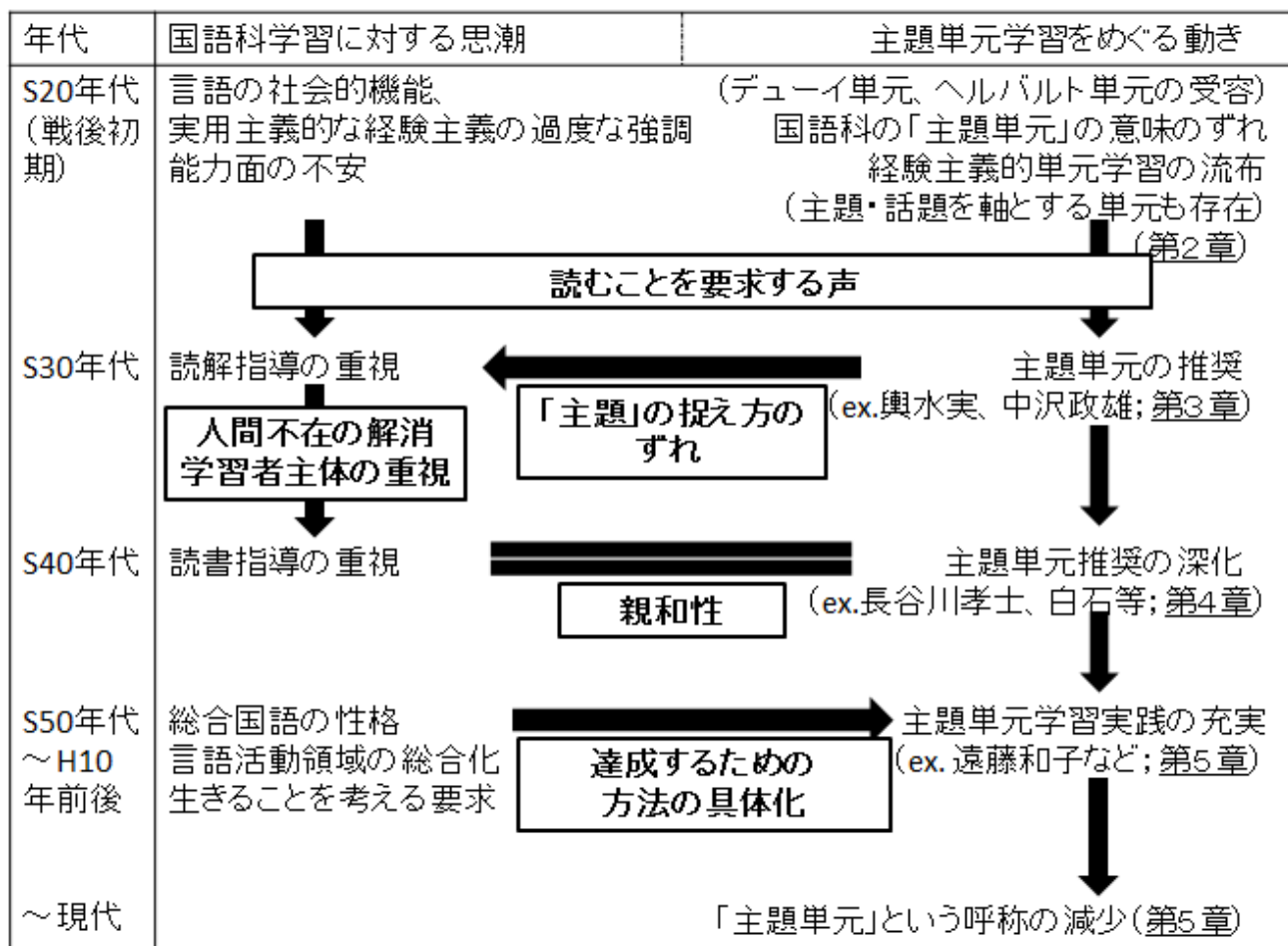
この年代において主題単元が実践として多く展開されるに至ったのは、昭和53年版高等学校学習指導要領において、現代文と古典、また、表現と理解の総合化を目指した新科目「国語Ⅰ・Ⅱ」に対応しようとしたことに由来していると言える。このような、指導要領レベルでの決定を達成するための具体的な方法として主題単元は採用されたのである。また、「生きること」を考えさせたいという願いを持つ実

践者が主題単元を採用したという文脈も存在した。

これらの主題単元の展開のいくつかは、前の年代にオピニオンリーダーとなっていた長谷川孝士の論を参考にしたものも見受けられる。ただその流れのみにとどまらず、様々な場所で様々な実践が展開されたことに価値が認められる。

ただ、それ以降、特別に「主題単元」という呼称の実践が報告される数は大きく減少することになった。そこには、主題単元実践が特殊なものとしての認識が薄くなっていったことや、文学教育における「主題」指導に対する否定的なまなざしが向けられたことの影響があると考えられる。

以上のように第3章から第5章まででは、戦後から始まる単元学習論の中での主題単元の展開を明らかにした。これらの章で明らかにした主題単元の展開は、以下のような図によってイメージすることができるであろう。



【図 C-1】 国語科における主題単元の展開の概略図

第6章 単元学習論のなかでの主題単元の価値

第6章では、まず上記【図 C-1】の中で、具体的で詳細な主題単元学習論が展開された昭和40年代以降の論の変遷の実態を検討した。また、「主題単元」という呼称がなされていないながらも、主題単元的な展開を持った単元学習論との比較から、主題単元の性格を検討した。ここでは、読むことを重視する単元学習論を構想する際には、抽象的な事柄を追究させようとする単元方式が浮かび上がってくることを指摘した。ただ、「主題単元」という呼称が用いられるものの性格として、「生きること」の追究に

よる認識思考力の育成が重視されるという点に特徴があることを指摘した。ここにも関連することとして、〈生きること〉の重視は、「国語科」観の広がりとして捉えられる。

さらに、様々な展開を見せてきた国語科における主題単元が、国語科の学習としてどのような価値を有しているのかを検討した。各時代において主題単元を求めようとした動機となったものからは、各学習者の個性を前面に押し出すことが可能な主体的な学びが達成されること、現代文と古典とを一連の言語文化として捉えることのできることで、表現と理解の関連を作り上げられること、〈生きること〉を考へることによる認識思考力の育成に寄与することができることなどの価値が見出される。また、各主題単元実践の成果からは、それが豊かな言語生活者の育成にも繋がることを見出した。

また、解決の難しい様々な課題に対応できることが求められるという学力観や、アクティブラーニングに代表される能動的な学びを達成するための学習方法などの要求がある現代的な文脈においては、主題単元がそれらの文脈に沿う面があることを指摘した。

結章 研究の総括と展望

以上のように、国語科における主題単元は、経験主義思潮にあった単元学習導入時には「教材単元」として認識されていたものの、「経験単元」としての性格も含み得ることから、戦後初期にもそのような単元が存在していた。そんな中、昭和 20 年代の終わりとともに単元学習論への注目は薄れていったが、その大きな理由として、読むことがなされていなかったということがあった。その方法として主題単元論が展開されたのが昭和 30 年代である。さらに時代が読解主義の思潮にあふれていた昭和 40 年代頃には、読むことの内実が問題とされ、主題単元論が展開されたのである。また、昭和 50 年代以降においては、現代文と古典の統合など、指導要領によって作り出された思潮や時代特有の学習者の実際に合わせるための方法として主題単元論、そして豊富な実践が展開された。

ここまでの展開は、特に読むことの領域における国語科教育の思潮と連動したものと評価することができる。つまり、各時代の主題単元への要求は、各時代の国語科教育の思潮を写し出す鑑であると言えることができる。

ただ、各時代に共通して主題単元に流れていたものは、学習者の内面を重視しようとする意図である。学習の場に、学習者の内面を持ち込むということは、その学習者固有の人生経験やテキスト経験、そしてそれらによって培われた価値観を登場させ、それらとの関連づけが行われることが期待できる。それは主体的なことばの学びへと繋がっていくであろう。また、学習者の内面を重視しようとする意図は、国語科以外の場におけることばの学びへと誘う要素でもある。学習者が生きていく上で、認識という武器を手にして欲しいという実践者の願いでもある。主題単元で扱う主題が簡単に答えを出せない問いであるからこそ、その後も、扱われた主題に対する自分なりの考えや内面を更新していく余地が残される。以上のことから、主題単元は特に生涯を通したことばの学びへと繋がっていくものであると言える。

本研究は、このような主題単元の展開とその性格を明らかにしたことを、国語科における単元学習論研究史の中に位置づけることができるものである。